

—草津市所蔵資料で七夕の歴史を知る—

じょきょうやさぶん こ
「女教艶文庫」(草津市蔵・うばがもちやコレクション)



七夕の行事は、織った着物を棚に供え、豊作を祈るとともに人々を清めるという、もともと日本にあった「棚機(たなばた)」の行事に、中国の牽牛(けんぎゅう)(彦星(ひこぼし)・織女(しよくじょ)(織姫(おりひめ))の伝承と、笹竹を立て針や糸などを供えて手芸・裁縫などの上達を祈る「乞巧奠(きっこうでん)」の風習が伝わって結びついたことが始まりとされています。

江戸時代、幕府が特に重要な日である「五節句」の一つに七夕を定めたことで、日本で広く知られるようになりました。糸や布の代わりに紙の短冊が使われるようになり、これが、現在でも伝わる七夕飾りのはじまりとされています。

『女教艶文庫』は江戸時代の初等教育用の教科書として使われた「往来物(おうらいもの)」のうち、当時の女性向け教科書で、

道徳を説く章、和歌や書などの教養を記した章、裁縫・料理などの家事を説明する章などから構成されています。「七夕」は家事の章に記されており、現在では男女を問わずさまざまな知識や教養を習得する時代ですが、この当時、裁縫は女性が身につける教養の一つとして考えられていたのかもしれません。

本書では、「七夕祭」の由来について、孝謙天皇(こうけんてんのう)の命で天平勝宝(てんぴょうしょうほう)7年(755)に初めて行われたとされています。また、清涼殿(せいりょうでん)の東庭と紫宸殿(ししんでん)の南階の間に机を4脚、燈台を9本立て、さまざまなお供え物をし、香を焚き、たらいに水を入れて彦星と織姫星の影を映しながら、針の穴に糸を上手に通すと願いが叶うとされていました。

(令和8年7月・草津宿本陣 杉浦 智里)